

〔生活〕探求への一試論 — 家政学における方法論的整備にむけて —  
 (その3) 問題の所在 — 認識対象としての「家政」 —

元福岡教育大 平田 昌 東筑紫短大の花崎正子  
 西九州大家政 河野孝子 佐賀大教育 赤星礼子

我々は、既に、「九州における高齢者の生活実態 — 佐賀県伊万里市大川町における —」という調査研究を第37回日本家政学会研究大会(於昭和女大)、同第38回大会(於岡山大)で、第1報、第2報、第3報、第4報として報告した。それらの考究の中で、あらためて家政学としての基礎理論考究の必要性を痛感し、理論探求に取り組み、第1報「〔生活〕探求への一試論 — 家政学における方法論的整備にむけて — (その1)」(第37回日本家政学会九州支部大会 於佐賀女短大)、第2報「〔生活〕探求への一試論 — 家政学における方法論的整備にむけて — (その2)」(第39回日本家政学会研究大会 於共立女大)として報告した。本報は、それに続く第3報である。

我々の意図するところは、家政学の方法論的整備にある。第1報では、「家政学の認識方法にもとづく認識対象」について、既発表資料について大枠的に考察した。第2報では、それらの資料における認識対象としての「家政」についての諸見解をとりあげ、概括的な解析を試みた(「家政」という語が、語義的に家政学の中核をなす主要な位置をもっているという今日までの現実になって)。

今回は、上記に引き続き、とくに、それら諸資料の「家政」解明に関して述べられている「システムとしての把握方法」をとりあげ、比較検討を試み、問題の所在を明らかにし、家政学方法論の整備に寄与しようとするものである。